

『シャーロット・ブロンテの生涯』研究 (11)

チャドウィック その1

芦澤久江

(1) はじめに

19世紀末から20世紀にかけてブロンテ家の伝記が多く出版されてきた。ギヤスケル (Elizabeth Cleghorn Gaskell, 1810-65) から20世紀初頭までの間に、伝記のエポックメイキングと思われる作品を書いたのはウィリアム・ライト (William Wright, 1837-99)、ショーター (Clement K. Shorter, 1857-1926) であろう。拙論で扱うエリス・チャドウィック (Mrs Ellis H. Chadwick) もその一人といえるかもしれない。彼女はこれまでの伝記を踏まえながらも、幾つか新しい発見を行い、502ページにも及ぶ大著を書きあげた。その発見が正しいとはかぎらないが、彼女はブロンテ伝記研究では現在でも謎のまま残されている問題へ果敢に挑んでいる。それゆえここではチャドウィックの新しい視点に焦点を当て、彼女が提起した問題について検証を行ないたいと思う。

(2) パトリック・ブロンテ——アイルランド

スクルトン (William Scruton, 1840-1924) やイエイツ (W.W. Yates) などの実地調査によってハーツヘッド (Harteshead)、ソーントン (Thornton) 時代のパトリック (Patrick Brontë, 1777-1861) の様子がおぼろげながらわかってきた。しかしそれでもいまだに謎に包まれた部分は多い。そこでチャドウィックがどこまでパトリックについての新しい情報を提供しているかが興味のある問題である。まずパトリック自身があまり語っていないアイルランド時代について、チャドウィックがどこまで検証しているか考察してみよう。

パトリックの祖先がアイルランドのどこから来たのか確かではないが、ライトによればボイン川 (the Boyne) 近くに住んでいたとされている。またライトは実際にアイルランドへ赴き、パトリックの生まれた家まで突き止めている。ただライトの研究には偏りがあり、証拠もないまま村人たちが語った話を事実であるかのように述べているため、のちに論争的とされた。結果としてラムズデン (J. Ramsden) やマカイ (Angus Macay) などに追及され、ライト自身が自分の主張に誤りがあったと認めざるを得なかった。それゆえライトによってパトリックの祖先について解明された部分もあるが、不明な点の方が圧倒的に多いのである。

チャドウィックはギヤスケルがパトリックはアハーダーグ (Aghaderg) 生まれだと説明しているのは間違いだと指摘している (7)。しかしギヤスケルはパトリックの話をもとに述べているので、パトリックは記憶違いをしていたのであろうとチャドウィックは述べている (7)。バンブリッジか

らウォレンポイント (Warrenpoint) 街道沿いの脇にニューリー (Newry) からラスフライランド (Rathfriland) に向かう街道があるが、その街道をニューリーに向かって行く途中、右手にパトリックの生家があり、それはニューリーまでは約8マイルのところに位置している (Chadwick 7)。おそらくチャドウィックはライトがパトリックの家として公表した場所に実際、足を運んだのであろう。現在ではライトがパトリックの生家と定めた家が真実かどうか疑問視さえされているが、それでもなおパトリックの生家として信じる者は多い。

出所を挙げていないので根拠は定かではないが、チャドウィックはエミリ (Emily Brontë, 1818-48) が父方の祖父に似ていたと述べている (8)。パトリックは背が高く、エミリも背が高かった。一方シャーロット (Charlotte Brontë, 1816-55) とブランウェル (Branwell Brontë, 1817-48) は背が低く、コーンウォール (Cornwall) 生まれの母親マライア (Maria Branwell Brontë, 1783-1821) に似ていた。アン (Anne Brontë, 1820-49) は気質も体つきも母親に似ていて、そのため伯母のエリザベス (Elizabeth Branwell, 1776-1842) にかわいがられていたという (Chadwick 8)。

チャドウィックはパトリックの誕生日の数字の偶然性に気づいている。パトリックは1777年3月17日で、これは偶然、アイルランドの守護神セント・パトリック (St. Patrick) が生まれた日と同じである。それゆえセント・パトリックに因んで名前がつけられたということはよく言われている。それとは別に、パトリックの生年月日は「7」が連続している。チャドウィックによれば「7」は完全な数字で、有名になるよう運命づけられていたという (6)。またパトリックが学士号をケンブリッジから取得したのは1814年4月23日で、シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の誕生日と同じ日であった。さらに、シャーロットの誕生日は4月21日であるが、シェイクスピアの誕生日に近い。ここまでくるとこじつけのように思われるが、パトリックの誕生日に「7」が多く連なっているという指摘は興味深い。

次にパトリックがイギリスに渡ってからアイルランドとの交流を絶ち、二度と帰らなかったとされている点についてはどうであろうか。ギヤスケルはパトリックがアイルランドには二度と帰らず親戚とつきあうつもりもなかったと述べている (78)。確かにパトリックは子どもたちにアイルランド時代のことや親戚のことはほとんど話していなかったようである。シャーロットの手紙のなかでもアイルランドの親戚についてはほとんど言及されている箇所はない。しかしギヤスケルはパトリックがアイルランドとの交流を断ってその出自を隠そうとしたという印象を植え付けた (Chadwick 12)。パトリックは『バプティズムの最盛期と形式についての小論文』 (*A Brief Treatise on the Best Time and Mode of Baptism*, 1836) のなかで次のように述べている。

Do you not know, that an Irishman is your lord and master? Are you not under the king's ministry? Are they not under O'Connell, an Irishman? And do not you or your friends pay him a yearly tribute under the title of rent? And is not the Duke of Wellington, the most famous, and the greatest of living heroes, an Irishman? An dare you, or your adherents, take one political step of importance without trembling lest it should not meet the approbation of your allies in Ireland?

(Chadwick 13-4)

またパトリックは『キラーニーの乙女』(*The Maid of Killarney*, 1818) でアイルランド人を「自由でユーモラスで何を考えているかわからない。彼らの勇気はときには向う見ずで、気前がいい。おそらく個性的な人が多い。だから彼らにひとたび会えばすぐに忘れることはなく、もう一度会ってみたいとたいていは思うものなんだ」と述べている (Chadwick 14)。

したがってチャドウィックはパトリックがアイルランド人であることを隠そうとしていたということはないと強調している (13-4)。チャドウィックが述べているように、パトリック自身はアイルランド生まれであることを誇りに思っていたにちがいない。しかしケンブリッジ (Cambridge) でパトリックは出自を隠さなかったであろうか。エリート集団のなかで、パトリックはアイルランド訛りのために口を開くだけで有名になっていた。それゆえ、心の中でアイルランドを誇りに思っていたとしても、パトリックは自ら出身地を明らかにすることは避けていたのではないかと思われる。しかしそれはアイルランド人であることを恥ずかしく思っていたというより、目立たないように控えめにしていたということかもしれない。そうでなければ、パトリックは『キラーニーの乙女』でわざわざアイルランドを題材にして書きはしなかったであろう。しかしブロンテ家でアイルランドの親戚についてどれだけ語られていたのかはわからない。

そこで、ケンブリッジに入学以降、パトリックはアイルランドに帰らず、親戚とも交流を絶っていたというもう一つの問題についてはどうであろうか。パトリックの末妹のアリス (Alice Brontë, 1797-1891) は、1891年1月15日に亡くなったが、彼女が8歳のときパトリックがケンブリッジに入学してから一度だけアイルランドに戻って来たと証言している (Wright 267)。またパトリックは死ぬまでアリスに金銭面で援助をしていたというのである。ライトはパトリックが母親のためにケンブリッジ在学中にも毎年20ポンドの送金をしていたと述べているが (Wright 264)、これはあり得ないことだと否定されている。なぜならパトリックがもらっていた奨学金はすべて合わせても大した額にはならず、どのように切りつめても授業料や寮費を払うだけで精いっぱいだったからである。アリスへの援助はパトリックが聖職の地位についてからのことであろう。こちらのほうが可能性が高いように思われる。このようなことから、チャドウィックはパトリックがアイルランドとの交流を保っていたと考えている (13-4)。

しかしパトリックの死後、アリスへの援助は途絶えてしまった。シャーロットの友人エレン (Ellen Nussey, 1817-97) はニコルズ (Arthur Bell Nicholls, 1818-1906) がブロンテ家の財産を受け継いだにもかかわらず、アリスには何の援助もしなかったことに憤っていたようである。エレンは『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847) の出版社であるスミス・エルダー社 (Smith & Elder) がアリスに対して何がしかの援助をしていたと思っていたようであるが、そうではなかった。バリナスキー (Ballynaskeagh) の友人コールドウェル博士 (Dr. Caldwell) が1882年に年間20ポンドの年金をアリスが亡くなるまで、慈善団体から受け取れるように腐心してくれたのである (Ramsden 94)。

次にもっと重要な文学的問題に移ろう。アイルランドはブロンテ姉妹にどれだけ影響を与えたか

という問題についてチャドウィックはどのように考えているのであろうか。驚くべきことにチャドウィックはパトリックの父親 (Hugh) の兄、つまりパトリック・オープランティ (Patrick O'Prunty) が書いたアイルランドの物語があると述べている (4)。彼が書いたとされる物語は「アイス・カウンシルの息子の冒険」 ('The Adventures of the Son of Ice Counsel') という物語で、ダグラス・ハイド博士 (Dr. Douglas Hyde) が1895年に出版した『初期ケルト文学の物語』 (*The Story of Early Gaelic Literature*, 1895) のなかに収められている (Chadwick 4)。これは朝から晩まで戦いの物語であるが、もしこの物語がほんとうにパトリック・オプランティによって書かれたものならば、パトリックが知らなかったということは奇妙だし、もし知っていたらパトリックがブロンテの子どもたちに話をしていただであろうと述べている (Chadwick 4)。チャドウィックはアイルランドがブロンテの子どもたちにインスピレーションを与えることはなかったかもしれないが、父親は多大な影響を与えているであろうと推測している (5)。たとえばシャーロットが13歳の時に書いた「アイルランドの冒険」 ('An Adventure in Ireland') は父親が語った物語を基にしている。チャドウィックはアイルランドがブロンテ姉妹の小説の基になっているというライトの説 (52-5) には懐疑的であるが、父親の影響は大きいと考えているのである。

(3) ウェザーズフィールドからハワースまで

パトリックが聖職の地位についてから問題となる点はメアリ・バーダー (Mary Burder) との関係である。現在までの研究では、パトリックがウェザーズフィールド (Wethersfield) でメアリ・バーダーと恋愛関係にあったことは確かであるといわれている。それはすべてオーガスタン・ビレル (Augustine Birrell, 1850-1933) の研究に依拠している。チャドウィックもまたこの件に関してはビレルの説を踏襲し、新たな意見は付け加えてはいない。

その後パトリックはハーツヘッド (Harteshead) 在任期間中、マライアと出会い、アトキンソン (Thomas Atkinson, 1780-1870) と聖職禄を交換してソーントン (Thronton) の司祭となった。パトリックはブラッドフォード・スクール・オブ・インダストリー (Bradford School of Industry) へ自ら出向き、二人の召使を探し当てた。その二人とはナンシー・ガーズ (Nancy Garrs) とセアラ・ガーズ (Sarah Gars) の姉妹であった。ナンシーは皿洗いと子どもの世話をし、ブロンテ姉妹の母親が亡くなってからも交流があった。彼女が病気になったとき、シャーロットがナンシーの住むブラッドフォード (Bradford) まで病氣見舞いに訪ねていったと伝えられている (Chadwick 48)。

ナンシーは82歳で亡くなり、1886年3月26日ブラッドフォードのアンダークリフ・セメタリー (Undercliff Cemetary) に埋葬された (Chadwick 48)。セアラはミセス・ニューサム (Mrs. Newsome) となりアメリカに移住した。セアラは彼女たちの苗字が「ガーズ」 (Garrs) ではなく「ド・ガーズ」 (de Garrs) だと主張している (Chadwick 48)。ガーズ家が貴族の血筋であることを主張しているのであろう。しかし今日まで、ブロンテ伝記において彼女たちの苗字は修正されずに「ガーズ」のままとなっている。

ガーズ姉妹は昔を思い出し、ブロンテ夫妻がやさしかったことしか覚えていないと述べている。ギヤスケルは伝記のなかで彼女たち姉妹が「浪費」(‘waste’) していた (87) と明かしたが、それは事実ではないと姉妹がパトリックに訴え、パトリックはギヤスケルに文言を訂正するよう、1857年8月17日に抗議の手紙を書いたのである。

パトリックはソーントンからハワース (Haworth) の司祭に転任したが、この転任に関してはギヤスケル以外に詳しく述べている研究者は少ない。しかしチャドウィックはパトリックがハワースに着任するまでの騒動を詳しく語っている。ソーントンで幸せな5年間を送ったのち、パトリックはブラッドフォードの司祭ヒープ師 (Rev. R. Henry. Heap, ?1789-1839) の提案でハワースの司祭として着任する予定であった。ところがハワース教会理事会はパトリックについて個人的に反対ではないが、この件についてブラッドフォード司祭から何の連絡も相談も受けていないので、パトリックを受け入れるわけにはいかないということであった。パトリックはこのような事情を聞いて、いったんハワースの職を辞退した。1819年6月にパトリックが辞退してから、ブラッドフォード司祭とハワース理事会の間でもめごとが一年ほど続いていたが、その間ブラッドフォード司祭から指名されたのが、レッドヘッド師 (Rev. Samuel Redhead, 1778-1845) であった。彼はハワースの司祭として三週間勤めたが、ハワース理事会の圧力によりハワースを辞任せざるを得なくなった。レッドヘッド辞任後、ブラッドフォードが他の司祭を任命したが、理事会は断固反対した。パトリックはその間も、理事会に手紙を数通書き送っていた。その結果、理事会がパトリックの人柄を認め、ハワースの司祭として受け入れ、迎え入れることに同意したのである。

ハワースの理事会に反対されて、パトリックが辞退したことはすでに述べたが、彼の辞意を表明した手紙は保管されており、彼の人柄がよく表われている。パトリックがハワースに着任するまでの経緯についてはギヤスケルもチャドウィックもほとんど同じ説明をしているが、チャドウィックによればハワース教会についてギヤスケルの記述に間違いがあるという。ハワース教会の場所にはかつて古代サクソン時代小礼拝堂が建っていたとされているが (Gaskell 56)、ヨーク大司教登録簿にハワース教会が登場するのは1317年である。小礼拝堂があったかどうかは何の証拠もないとチャドウィックは述べている (51)。チャドウィックはストーリー (T.W. Story) が書いた「ハワース登録簿についての覚書」(‘Notes on the Old Haworth Registers’) を基に反論しているが、ギヤスケルは教会堂の塔にキリスト教布教以前の銘板が残されているので、小礼拝堂があったことは間違いないと述べている。チャドウィックは、ギヤスケルには何の証拠もないとしているが、これは明らかにチャドウィックの誤りである。

(4) クラージー・ドーターズ・スクール (カウアン・ブリッジ)

ソーントンの幸せな5年間と比べると、ハワースは何と悲劇の場所だったであろう。ハワースではブロンテ家の母親マライア (Maria Branwell Brontë, 1783-1821) が早々と亡くなってしまった。そのためブロンテ家は暗い影に覆われていた。残された子どもたちの面倒をみるために、母親の姉

エリザベスがやって来たが、子どもたちの母親代わりにはならなかったようだ。エリザベスは、ドレスやうわさ話より、本や動物が好きなブロンテ家の子どもたちを風変わりだと思っていた。伯母が見たブロンテ家の子どもたちの評価については、マライアはだらしがない、エリザベスは自分と名前が同じであることから、やさしい、シャーロットは興奮しやすくなるとなる、エミリは半ば従順だが、誰の意見もおかまいなし、ペットの動物といるときだけ幸せ、アンとブランウェルはエリザベス自身の喜びの源だった、とチャドウィックは述べている (68)。この記述はどこからもたらされたのか、チャドウィックが明らかにしていないので、信憑性はない。ところが、ブロンテの子どもたちそれぞれの特性を正確に捉えているようにも思われる。一方、ギヤスケルも述べているように、子どもたちは伯母を愛すのではなく、尊敬していた (96-7)。メソディストであったエリザベスは規律正しく、子どもたちにとっては彼女が一家の掟そのものだったのである (Chadwick 69)。

子どもたちの教育はパトリックとエリザベスによってなされたが、ブランウェルとアン以外の4人はクラージー・ドーターズ・スクール (Clergy Daughters' School) へ行くこととなった。ギヤスケルはこの学校はかつて糸巻き工場だったと述べているが、チャドウィックは学校がキャストトン (Casterton) に移転してから旧校舎が糸巻き工場になったと指摘している (65-6)。これはチャドウィックの主張が正しく、ギヤスケルは第三版でこの点について訂正している。

チャドウィックによれば、ブロンテ姉妹がこの学校に入学したとき、入学金7ポンド、本、衣服代として4ポンド、さらに1825年には3人の子どもたちに7ポンド、マライアのフランス語、絵の授業料3ポンド、その他衣服114シリング8ペンス、シャーロットの衣服18シリング7.5ペンス、エミリに13シリングの費用が必要とされた (76)。

ハワースからカウアン・ブリッジへ行くには当然、馬車での旅を余儀なくされた。しかしリーズ＝ケンダル (Leeds-Kendal) 間を乗合馬車が毎日走っており、停留所はキースリーにあったため、比較的便利であった (Gaskell 97)。これに関連してチャドウィックはその途中にあるエシュトン・ホール (Eshton Hall) に言及している (79)。乗合馬車はキースリー (Keighley) からスキプトン (Skipton) を経由してエシュトン・ホールを通って行った。エシュトン・ホールは蔵書家のミス・カラー (Miss Currer) の邸宅として、ハワースにもその名声は届いていた。シャーロットがのちに作家になったとき、このエシュトン・ホールの「カラー」という名前に因んでペンネームをつけたといわれているのである。

カウアン・ブリッジは当初、生徒16人しかいなかった (Chadwick 78) が、ギヤスケルは70人から80人いたとしている (101)。ブロンテたちが辞めた1825年6月頃には生徒数が53人になっていた (Chadwick 78)。

理事長のキャリス＝ウィルソン (Rev. William Carus-Wilson, 1791-1859) は宗教教育に関して厳しく、しかも偏狭だったが、シャーロットが『ジェイン・エア』で追究しているほどではなかった、とチャドウィックは弁護している (79)。確かに『ジェイン・エア』で描かれているように、学校が設立して一年目のときは遠くの教会ターンストール (Turnstall Church) まで礼拝に行かなければならなかった。だがその後、司祭出張礼拝堂であるレック教会 (Leck Church) がその代わりとなり、

ターンストールまでわざわざ出向くことはなくなったのである (Chadwick 80)。

チャドウィックは学校の記録簿をさらに調べ、生徒たちの服装について次のように述べている。

The girls in winter wore thick purple dresses and short caps, whilst on cold or wet days they had green plaid cloaks and pattens. The hair was cropped, and night caps were worn, but pocket handkerchiefs do not appear in the list of clothing. On week days brown Holland pinafores were worn and white ones Sundays. In summer the girls had green and white straw bonnets trimmed with green calico, buff dresses of nankeen, with short sleeves and high necks and short sleeves, white cotton stockings and strong shoes. (81)

この記述から、冬には生徒たちがぬかるみ用の靴（パッテン）を履き、寒いときには上着を着ていたことがわかる。ただしその上着が寒さをしのぐのに十分なものだったどうかはわからない。『ジェイン・エア』ではジェインが1時間もかけて教会にお祈りに行き、足も手もかじかんでしまい夜になるとその足が悲鳴をあげたくなるほど痛くなると描かれている (92)

カウアン・ブリッジでマライアやエリザベスだけでなく、生徒の大半が亡くなったのは確かである。だがバーカー (Juliet Barker) は当時、寄宿学校で子どもが亡くなるのは珍しくないとしている (127)。名門のロサール (Rossall)、ラグビー (Rugby) でさえそうした事態は避けられなかったのである (Barker 127)。

驚くべきことにエリザベスが無力熱にかかり学校から送り返されてきたときの費用についてチャドウィックは明らかにしている。

Elizabeth's fare home, guard, and coachman	13	0	
Mrs. Hardacre's fare	18	0	
Horse, gig, pikes and men	2	6	
Mrs Hardacre's bed in Keighley	1	0	
2 letters	1	4.5	(Chadwick 76)

この記録は学校の会計簿からとられたもので、ブロンテ伝記研究者の間でもあまり知られていない。したがってこの情報はチャドウィックの大きな功績の一つであり、たいへん貴重なものである。会計簿を見ると、エリザベスがハワースに戻されると、ハーダカー夫人 (Mrs. Hardacre カウアン・ブリッジの使用人) が付き添って来たことがわかる。また彼女のキースリーでの宿泊代も請求されている。

エリザベスの前にマライアがハワースに同じ病気で送り返されたが、これについては記述がない。二人の子どもが次々に病気で送り返されたことに驚き、パトリックはシャーロットとエミリをカウアン・ブリッジまで迎えに行く。幸運にもシャーロットとエミリはカウアン・ブリッジの理事長キャ

ルス＝ウィルソンの別荘があるシルバーデイル（Silverdale）に移されていた。彼女たちは病気の感染から逃れるために、急遽シルバーデイルに避難させられていたのである。

シャーロットとエミリは1825年5月31日にシルバーデイルに送られ、そこで一晚過ごした。ここでチャドウィックはある問題を提起している。ギヤスケルは、1839年9月頃エレン・ナッシーとともに旅をしたブリドリントン（Bridlington）で、シャーロットが生まれて初めて海を見たと言っている（191）。しかし病気感染を免れるためシャーロットが滞在したシルバーデイルの別荘は海に面している。たとえ一晚の滞在であってもシャーロットが海を見ないで過ごしたはずはないと思われる。それゆえチャドウィックはシャーロットが初めて海を見たのはシルバーデイルで、ブリドリントンではないはずだと主張している（78）。これに関してはチャドウィックが述べているように、ギヤスケルの記述が間違っているのである。

さらに興味深いこととして、この別荘から10分も離れていないところにリンデス・タワー（Lindeth Tower）がある。そこでこのときから31年後にギヤスケルが『シャーロット・ブロンテの生涯』（*The Life of Charlotte Brontë*, 1857）を書くことになったという奇妙な巡り合わせをチャドウィックは指摘している（78）。

（5）エミリはいつロー・ヒルに滞在していたのか？

チャドウィックが提起している問題のなかで、エミリのロー・ヒル（Law Hill）滞在期間はいつからいつまでだったのかということがある。エミリのロー・ヒル時代については現在も謎であり、明確に示されていない。チャドウィックが着目したのはシャーロットの手紙である。シャーロットは親友エレン宛の手紙のなかでエミリがロー・ヒルに行き過酷な労働を強いられている、と述べている。

My Sister Emily is gone into a Situation (*sic*) as teacher in a large school of near forty pupils near Halifax. I have had one letter from her since her departure it gives an appalling account of her duties——had labour from six in the morning until near eleven at night. with (*sic*) only one half hour of exercise between——slavery I fear she will never stand it.

(Smith 1: 182)

ギヤスケルによればこの手紙は1836年10月2日にシャーロットが書いたものである（165）。個人的にシャーロットの手紙を印刷したホースフォール・ターナー（Horsfall Turner）も同じ日付となっている。ところがショーター（Clement K. Shorter）はこの手紙の日付を1837年4月2日としている。またギヤスケルはエミリがロー・ヒルに勤めていた期間は6カ月しとしている（159）。もしギヤスケルが正しいとすればエミリがロー・ヒルにいたのは少なくとも1836年10月～1837年春となる。しかしシャーロットは1839年3月の手紙でヘンリからプロポーズされたことについて述べ、エミリは

家を離れて苦しんでいると書いている (Chadwick 123)。そうするとエミリは2年半ハリファックスにいたことになってしまう (Chadwick 123)。またアンとエミリは日誌を4年ごとに書いており、1841年7月31日の日誌で4年前を振り返ってアンはエミリがハリファックスの学校を辞めたと書いている。それゆえ、エミリは1836年10月頃赴任し、1837年の春以降にロー・ヒルを辞めたということになる、とチャドウィックは結論づけている (123)。

この問題についてチャドウィックの主張を検証してみよう。まずギヤスケルが1836年10月2日付としている手紙だが、スミス (Magaret Smith) の研究により、この手紙の日付は1838年10月2日付であるということが判明している。というのはシャーロット自身が1838年を1836年と書き間違えてしまったからである。スミスは封筒のスタンプを入念に調べ、郵便局名と日付が一つのスタンプになっていることを発見した。シャーロットがこの手紙を投函したデューズベリー地区では、郵便局名と日付が一つのスタンプで押されるようになったのは1838年9月12日からのことである (Smith 1:182 n. 2)。すなわち1836年にはまだこのようなスタンプは押されていなかったのである。

またシャーロットはこの手紙をデューズベリー・ムーア (Dewsbury Moor) で書いているが、彼女がデューズベリー・ムーアに赴いたのは1837年12月のことである。したがって手紙は1836年ではなく、1838年であると考えられるのである。

しかし前述したように、チャドウィックは、シャーロットがヘンリからのプロポーズの話題と一っしょにエミリが家を離れて苦しんでいることを手紙 (1839年3月) で語っていると述べている (123)。ところがこの手紙 (1839年3月12日付) には、エミリに言及している箇所はどこにも見当たらない。ただアンがブレイク家の家庭教師に出かける予定であると書かれている。おそらくチャドウィックは、アンとエミリを混同してしまったのであろう。それゆえこの手紙がエミリのハリファックス滞在期間を証明する証拠とはならないのである。そこで手紙の正しい日付から推測すると、エミリが少なくとも1838年10月2日にはすでにロー・ヒルに赴任していたことは明らかである。

それに対してエミリがロー・ヒルを辞職したのはいつかという問題について考察してみよう。前述したように、ギヤスケルはエミリが半年で学校を辞任したと述べている。またシャーロットは身の回り品を家にいるエミリから送ってもらい、お礼の手紙 (1839年7月?) を書いている。したがってエミリは1839年7月頃には完全にロー・ヒルから家に戻っていたことになる。これらすべてを繋ぎ合わせてみると、エミリがロー・ヒルに滞在した期間は1838年9月頃～1839年2月あるいは3月頃と推測されるのである。

(6) *Kitty Bell* は誰が書いたのか?

今日、ブロンテ研究のなかで『キティー・ベル』 (*Kitty Bell, the Orphan*) が話題に持ち上がることはまったくない。それは無駄な議論だからという理由かもしれないが、意外にこの作品の存在さえ知らないブロンテ研究者は多いのではないであろうか。チャドウィックは誰の作品なのかという問題を掲げて検証を行なっている。まず問題の発端となった作品がウジェーヌ・スー (Eugène

Sue, 1801- 57) の『メアリ・ローソン』(Mary Lawson) である。この連載小説は1850年10月から1851年3月にかけて『ロンドン・ジャーナル』(*London Journal*) に掲載された。これは明らかにフランス語を英語に訳したものであるが、フランス語の雑誌に掲載されたのかどうかは不明である。そしてその縮約版『ミス・メアリ』(*Miss Mary, ou l'Institutrice*) がウジェーヌ・スーの作品の編者であるアーネスト・フラマリオン(Ernest Flammarion) によって出版されたのである。

『ロンドン・ジャーナル』に掲載された『メアリ・ローソン』と縮約版の『ミス・メアリ』は同じものであるが、『メアリ・ローソン』に含まれていた二つの短編『キティ・ベル』と『ジュリオとエレナ』(*Giulio and Eleanor*) が『ミス・メアリ』ではなぜか省かれていたのである。そして内容的にシャーロットとの深い関連性を指摘されているのが、この削除された短編『キティ・ベル』である。

『キティー・ベル』は明らかに『ジェイン・エア』を模倣したものである。たとえば物語の主人公は孤児キティーで、ジェイン・エアと同じように寄宿学校(The Kendal Institute) に入れられる。学校でキティーの友人となったアグネス・ジョーンズ(Agnes Jones) もまたシャーロットの友人ヘレン・バーンズと同じように死んでいく。のちにキティーはバースに移住し、そこでクレオールanza イザベラ・ハッチンソン(Isabella Hutchinson) と出会い、彼女がキティーのライバルになる。ここまでのあらすじは『ジェイン・エア』と酷似している。しかし問題となるのは、あらすじが似ているということだけではない。シャーロット、あるいは彼女の友人などごく身近な人しか知らない個人情報『キティー・ベル』には含まれているのである。この作品はギaskellがシャーロットの伝記(1857年) を出版する前に『ロンドン・ジャーナル』で掲載されているので、シャーロットの生い立ちなどを詳しく知っている者がその情報を洩らしていたということになる。

その例をいくつか挙げてみよう。シャーロットはカウアン・ブリッジで西インド諸島出身のメラニー・ハーン(Mellany Hane) という友人がいた(108)。しかしこの事実はシャーロットが亡くなってから、ギaskellが伝記で述べるまで知り得る情報ではなかった(108)。ところが『キティー・ベル』ではキティーがクレオールのイザベルに出会い、友人になる場面が描かれている。またシャーロットはウラー先生に宛てた手紙のなかで、カウアン・ブリッジで皮膚病に罹った生徒がいたことを告げている。しかしこの手紙が公表されたのは、1896年のことであった。ショーターは『シャーロット・ブロンテとその周辺』(*Charlotte Brontë and her Circle*, 1896) において、ギaskellが公表しなかった手紙を数多く発表した。そのなかにシャーロットがウラー先生に宛てた未発表の手紙12通も含まれていた。驚くべきことにショーターがこれらの手紙を発表する前に、『キティー・ベル』ではすでにシャーロットがウラー先生宛ての手紙で語ったようなことが書かれていたのである。

I have been awake half the night, tormented by the acute shootings of the sores upon my chest and limbs. The doctor calls this complaint the herpes. (Chadwick 403)

これまで見てきたように、『ジェイン・エア』と酷似しているだけでなく、シャーロット、あるいは親しい友人しか知りえない情報が『キティ・ベル』に盛り込まれていることから、チャドウィックは『キティ・ベル』がシャーロットによって書かれたと見ている (402)。1843年ブリュッセルにシャーロットが滞在していたとき、あるいは1844年から1845年シャーロットがハワースに戻ってから、いずれにしてもエジェ家にその原稿の写しがあったとチャドウィックは推測している (402)。一方マラム＝デンプルビー (John Malham-Dembleby) やメイ・シンクレア (May Sinclair) はチャドウィックとは意見が違い、『キティ・ベル』はおそらくエジェ家から提供された情報をもとにウジェーヌ・スーによって書かれたと考えている (Sinclair 245)。

しかしそう考えるにはいくつか不自然な点がある。まず、物語で使われている名前はブロンテ時代にハワースではありふれた名前であり、現在でも使用されている。たとえば、ヒートン (Heaton)、パーカー (Parker)、ランバート (Lambert)、ハッチンソン (Hutchinson)、ライト (Wright)、ブリッグズ (Briggs)、ブラウン (Brown) などである。これらの名前をベルギー人が覚えるのは難しく、エジェ家の人々の情報だけをたよりに物語を書くことは無理である。

さらにチャドウィックは『キティ・ベル』には文章においてもブロンテ的なところがあると指摘している (404)。

One evening, about the middle of March, just as that pleasant hour of twilight, when two of God's wonders, Night and Day, cross each other like ships on the sea... (Chadwick 404)

ここに描かれている文章はシャーロットが『シャーリー』(Shirley, 1849) で夜から昼への不思議な移り変わりについて描写している部分と類似しているとチャドウィックは分析している (404)。さらにチャドウィックは、『キティ・ベル』をシャーロットが書いた証拠として文体の問題も指摘している (404)。ウジェーヌ・スーとシャーロットの文体は明らかに違うというのである。

『キティ・ベル』は確かにドラマチックな点で『ジェイン・エア』よりもはるかに劣っているし、主人公が『キティ・ベル』では一貫していない。このように稚拙な部分が目立つのはシャーロットがまだ構想段階だったからであるとチャドウィックは述べている (405)。つまり、『キティ・ベル』での教室風景の描写は一貫してシャーロットが好んだもので、『教授』(The Professor, 1857) を経て、『ジェイン・エア』、『ヴィレット』(Villette, 1853) への道筋と成長の軌跡を明確に辿ることができる。それゆえ、『キティ・ベル』はシャーロットが書いたものであるとチャドウィックは主張しているのである。

現在ではこれに関して新たな証拠も発見されていないので、さらに追究することはできない。ただわたしの見解は『キティ・ベル』はシャーロットが書いたものではないと思われる。シャーロットは子どものころから物語を書きため文章修業を行っていた。子どもであってもシャーロットはドラマチックな場面を描くに長けていて、決して稚拙な文章は書いていない。そうした点から『キティ・ベル』はシャーロットではなく、ウジェーヌ・スーが書いたと考えられる。ウジェー

ヌ・スーは何らかの方法でシャーロットの生い立ち、あるいは幼少時代について書いたものを入手することができたかもしれない。そして彼は『ジェイン・エア』だけでなく、シャーロットの生い立ちなども参考にして『キティー・ベル』を書き上げたのであろう。前述したように『キティー・ベル』の問題は今日取り沙汰されることはないが、未だに謎のままでありブロンテ研究において決して軽視してはならないものである。

それではもしシャーロットが『キティー・ベル』を書いていないとすれば、この作品が『ロンドン・ジャーナル』に掲載されたことをシャーロットは知っていたのであろうか。シャーロットの手紙において『キティー・ベル』に言及した記述はない。『キティー・ベル』が連載されていたとき（1850年10月～1851年3月）、シャーロットはきわめて多忙であった。『嵐が丘』（*Wuthering Heights*, 1847）、『アグネス・グレイ』（*Agnes Grey*, 1847）の第二版に掲載する序文を書いたり、ハリエット・マーティノウ（*Harriet Martineau*, 1802-76）の自宅を訪問したり、ロンドンのスミス宅に招かれサッカレー（*William Makepeace Thackeray*, 1811-63）と対面したのもこの頃であった。シャーロットは体が弱く、あまり人と活発に交流する性質ではなかったが、このときは珍しく、精力的に文学界の人々と会っていた。たとえこのように多忙であったとしても、シャーロットが『キティー・ベル』に何も言及していないというのはたいへん奇妙である。

実際、シャーロットは『キティー・ベル』を書いたと考えられている作者ウジェーヌ・スーを知っていた。『教授』において、ハンズデン（*Hunsden*）の蔵書のなかの一冊として、フランス人作家ポール・ド・コック（*Paul de Kock*）、ジュルジュ・サンド（*George Sand*, 1804-76）とともにウジェーヌ・スーの名前が言及されている（24）。ウジェーヌ・スーは初め医者であったが、その後軍人となり、その後で、作家となった。シャーロットが『キティー・ベル』の作者ではなく、『ロンドン・ジャーナル』で連載されているのを知れば、出版社のスミス・エルダー社に相談していたであろう。あるいはシャーロット自身が『ロンドン・ジャーナル』を剽窃の罪で訴えていたかもしれない。おそらくシャーロットはそうした情報については何も知らなかったと思われる。

フランス語版で『キティー・ベル』とともに削除された『ジュリオとエレナ』はミセス・メイウッド（*Mrs Maywood*）の娘の話であるが、これもまた『嵐が丘』と類似している（*Chadwick* 408）。ヒロイン、エレナは『嵐が丘』のキャサリン（*Catherine Earnshaw*）のように、愛していない男性の妻として埋葬される。しかし前の恋人がやって来て彼女の墓を暴き、死んだ彼女を両腕に抱きあげ連れ去ろうとすると、彼女が息を吹き返すというストーリーである。確かにこの物語もまた『嵐が丘』によく似ているが、『キティー・ベル』ほど重要な問題ではない。なぜなら『キティー・ベル』にはシャーロット、あるいはごくわずかの知人だけしか知らない事実が含まれているが、『ジュリオとエレナ』は『嵐が丘』を模倣しているというだけのことからである。ただこの『ジュリオとエレナ』も前述したようにフランス語で出版されるときには削除されていた。著作権侵害の問題あるいはその他の何らかの支障があったために削除されたことは、ほぼ間違いなさであろう。

(7) おわりに

チャドウィックは過去の文献に依拠するだけでなく、ブロンテ研究において新たな問題を提起している。エミリがロー・ヒルに滞在した期間など、それほど重要な問題ではないと考える研究者もいるかもしれない。特に現在ではテキストはテキストとして読むことが重視され、作品と伝記を相互に関係させて読むことは古い文学理論だと揶揄されがちである。テキストをテキストとして読む楽しさもあることは確かである。しかし伝記研究はテキストとは別に、作品を研究するうえで欠かせない基礎研究である。テキストを読むときに、伝記的事実が関係し、それによって解釈が大きく異なってしまうこともある。それどころか真実を見落としてしまう恐れすらあり得る。とりわけブロンテ文学ほど伝記的事実と結びついている文学はない。それゆえブロンテ文学においては作者と伝記は不可分に結びつき融合しているのである。

ところがブロンテの伝記は事実として受け入れられているものでも、その出典を辿っていくと単なる村人の言い伝えにすぎないことも多い。21世紀の現在でも、ブロンテの伝記は事実、言い伝え、伝説、神話が混在したままである。それゆえその伝記的事実がどこからもたらされたのかその淵源を探し当てることはブロンテ研究においてとても重要なことなのである。

引用文献

- Barker, Juliet. *The Brontës*. London:Wedienfield and Nicolson,1994.
 Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Penguin Books,1996.
 ----- *The Professor*. London and Melbourne: Everyman's Library,1985.
 Chadwick, Mrs Ellice H. *In the Footsteps of the Brontës*. London:Sir Isacc Pitman & Sons, Ltd.,1914.
 Malham-Demblebey, John. *The Key to the Brontë Works*. New York and Melbourne: The Walter Scott Publishing Co., Ltd.,1911.
 Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. Penguin Books,1987.
 Ramsden, J. *The Brontë Homeland or Misrepresentations Rectified*. Westminster:The Rocaburghe Press,1897.
 Shorter, Clement K., *Charlotte Brontë and her Circle*. London:Hodder &Stoughton,1896.
 Sinclair, May. *The Three Brontës*. London:Hutchinson and Co., 1914.
 Smith, Margaret. *The Letters of Charlotte Brontë, Volume I 1829-1847*. Oxford: Clarendon Press, 1995.
 Wright, William. *The Brontës in Ireland*. London: Hodder & Stoughton,1894.

